



2月20日（土）、いなかとまちのくるま座ミーティングを豊田商工会議所で開催しました。今回のテーマは、「いなかとまちのミライを考える」。当日の模様を午前の基調講演、午後のくるま座談義に分けてお伝えいたします。

いなかとまちのくるま座ミーティング 「とかいなか」をとよたの「らしさ」に

まちなか
MACHINAKA

基調講演

「豊田らしいってなんだろう？ 地域の『らしさ』とその見つけ方と伝え方」

深谷信介さんは、広告会社である博報堂ブランドデザインスマー ト×都市研究所長で、国の地方創生人材支援制度を通じて富山市をはじめとした様々な地域に入られ地域づくりに関わられています。今回、はじめて豊田市にお越しになり「豊田市は、製造業が多くある大都会なんだ！」というイメージを持たれていましたが、前に中山間地域を訪問され、「豊田は『とかいなか』なんだ」と認識を一新したとのこと。現在、国が推進している「地方創生」は「真に持続的なまち、くらしを創るチャンス」であり、そのために「豊田らしいってなんだろう」という「らしさ」を見つけていくことが大事だそう。「ブランド」というのは、まず強みを決め、その強みを体现するしるしをつけることで

あり、そのしるしをもとに行動し、強みを魅力にし続けることが「ブランディング」だと言明いただきました。「豊田市には都会と田舎のよさがある」と大雑把に言うてしまうのではなく、その良さがどんな価値を持っている、その価値に触れた人はどんな心持ちになっている、だから社会全体としてはどういう価値がある…ということを構造的に考えていくことが「らしさ」を見つけるために大事だということです。次に、その豊田市「らしさ」が見つかったと仮定して、どのような伝え方があるかのヒントとして、①まちの商品や技術に正面から向き合いブランド化している『今治タオル』、『鯖江のめがね』や、②まちのしごとや技術に正面から向き合い、新たな可能性を見出し効果的に伝えている『浜のミサンガ』、『ジュエリーかまた』を例に、動画や実際のCMから「共感編集」のテクニクをご教示いただきました。まちの「何」を「どう」伝えていくかを考える時に、①消費者でなく、生活者にどう届けるか、②ホンモノでないと届かない、③仕事ではなくて暮らし、

とよた山里暮らし通信員

おいでん・さんそんず レポート

vol.3

向き合う心

旭に移住してから3人の子どもが産まれた。4歳、2歳、0歳になる。夫婦ふたりではとても大変だけでも、近所のじじばばや、友人、仲間たちの協力で、毎日の暮らしが繋がっていく。彼らの前には道はない、彼らが一步一步道を切り拓いていくことを親として先輩として、どう向き合っていこうか、日々試行錯誤の連続。旭地区のもっとも大切な財産のひとつは「向き合う心」ではないかと多くの先輩がたの背中から感じている。ひととひととの関係性が濃い



からこそ、向き合うことが多い、喜怒哀楽も多い。次の世代につながっていくための豊かな感性を子どもたちと一緒に育んでいきたいと思う。

レポート



戸田友介さん
旭地区在住

豊田市・東京大学による「日本再発進！若者よ田舎を目指そうプロジェクト」を受託し、全国公募の若者10人を社員として受入れ、愛知県豊田市旭地区への移住に挑戦。プロジェクト終了後はメンバーが独立した後に、宿舎であった福蔵寺をシェアハウスとして活用。新聞販売店をはじめとして移住者の仕事づくりを支援している。

イベント情報

第5回 ほんわか里山交流まつり in香恋の里

スローライフ、新しい生き方発見！春の里山でおいしい体験、楽しい体験しませんか？やさしい木のおもちゃで遊べるよ。

- 日時：3月20日（日） 10:00～15:00
- 場所：まどいの丘（豊田市神殿町中切7-2）TEL:0565-90-4488
- 出演者：豊栄会（舞踊）下山民舞会（民舞）大正琴愛好者グループ（大正琴）大沼雅楽保存会（雅楽）雅（太鼓）下山中学校（ブラスバンド）ハッピーマザー＆ファーザーの会（手話コーラス）山里合唱団こだま（合唱）ジャラヴィカン（アフリカダンス）
- 内容：イノシハムの試食・チャリティー募金（しもやま再来プロジェクト）・農薬不使用下山産和紅茶・ほうじ茶の飲み比べ（いのまた茶園）・しいたけ菌打ち体験・薪割り体験
- 五平餅・鮎の塩焼き・手打ちそば・イノシシフランク・おばあちゃんの漬物・手作りこんにやく・つきたて餅・焼き菓子・パン・オーガニック珈琲などおいしい山里の食のお店もたくさん。木のおもちゃや手芸品、小物などいろいろな店があります。※マイ箸・マイ皿のご持参をお願いします。
- 問合せ：おいでん・さんそんセンターTEL:0565-62-0610
- 実行委員会（新実）TEL:090-8672-9374

『一人の例外もなく、支え守り合う関係をめざして』 ～アルプス子ども会に見る未来～

支え合いの社会を目指して、次世代の子どもたちのことを一緒に考え、学ばせませんか？大きなテーマ『ひとりの例外もなく、支え守り合う関係』を掲げ、設立当初からアルプス子ども会と共に歩んできた綾崎幸生氏にお話して頂きます。

- 日時：3月11日（金）10:00～15:00
- 場所：足助交流館（豊田市足助町蔵ノ前16）TEL:0565-62-1251
- スケジュール：9:30～受付◆昼の部①10:00～12:00講座②昼食～15:00質問&シェアタイム◆夜の部③18:00～足助山里ユースにて夕食&懇親会

詳しくは、Facebookイベントページへ

<https://www.facebook.com/events/486775354862887/>

- 申込方法：予約・申込み先：TEL:090-5453-6400（山本）e-mail:sigekayo@-juno.ocn.ne.jp 下記項目をメールで送るか、電話でお伝えください。締め切りは3月4日（金）です。

- 1.お名前 2.同伴される方がいる場合はお名前、お子さんなら年齢も
- 3.連絡先（〒 ）（TEL ）
- 4.参加希望に○を記入ください。昼の部（ ）夜の部（ ）
- 5.【昼の部に参加される方】＊お弁当の注文（ ）個【夜の部に参加される方】＊夕飯のみ（ ）人 内、子ども食（ ）人＊夕飯・宿泊（ ）人 中学生以下（ ）人 内、子ども食（ ）人＊夕飯・宿泊・朝食（ ）人 中学生以下（ ）人 内子ども食（ ）人

- 問合せ：おいでん・さんそんセンター次世代育成部会（小黑）TEL:0565-62-0610 e-mail:sanson-center@city.toyota.aichi.jp

その他の情報は、センターHPをチェック！
<http://www.oiden-sanson.com/event/>

おいでん・さんそんビジョン

山村地域の振興及び都市との共生に関する基本方針「おいでん・さんそんビジョン」が起草され平成27年度内に策定される。合併10年を機に、都市と農山村の共生、山村振興を総合的に推進するため、2040年の将来像を展望し、向こう5年間の施策の方向性が素案として示されている。

現状のまま推移すれば、2040年の山村地域の人口は半減し、小中学生は現在の3分の1に減少、高齢者が8割を占め、50集落が消滅し、全集落の約半数100集落がいわゆる「限界集落」となるというショッキングな推計も示された。これに果敢に立ち向かい、『自立』と『つながり』で支え合い、豊かさを創造する山村にしようという極めて高い目標である。

施策の柱は、「移住・定住の促進」、「都市と農村の支え合い」、「地消地産による生業づくり」などおいでん・さんそんセンターがテーマとして取り組んでいることとピタリ符合する。

「暮らし満足都市」の実現を目指し、中間支援機関として設立されたおいでん・さんそんセンターの3年間は、いわば手探りの試行期間の取組であった。平成28年度からは、ビジョンの推進機関として明確に位置づけられ、「いなか暮らし総合窓口」も担うことになる。

これまでの取組が評価され、施策にも反映された喜びの一方で、「試行だから」と言い訳できない責任の重さを痛感している。





しました。各班で出てきたキーワードは、「自分の役割と地域のニーズ」「つなげる・発信する」「自分事として小さくてもリスク

ブンし、約2000人の村に1年で延べ1000人以上が訪れ、移住者も増えています。いなかのシェアハウスの共通点として、弱いからこそ可能性を引き出し合ってシェアしている事が見えた分科会でした。

地域スモールビジネス研究会

毎月開催している「地域スモールビジネス研究会（SBR）」をオープン型で開催。コーディネーターは一般社団法人地域問題研究所の加藤栄司さん、コメントーターは深谷信介さん。話題提供者としてSBR出版部世話役の高木伸泰さん、ミライの職業訓練校世話役の鈴木孝典さん、豊田市リノベーションまちづくりプロジェクトの小野健さん、杉ん工房の渡邊さとみさんにそれぞれの活動をお話いただいた後、4つのグループに分かれて小仕事のつくり方、仲間の集め方について話

を「負う」「地域の人と信頼関係を築く」「多様性を認め合い、フレキシブルに」など。最後に深谷さんは、田舎での小仕事作りのコツを3つの「好き」という言葉でまとめられました。「好き」：やりたくてしょうがないことをやる。「空き」：余白・不完全。「透き」：ピュアにやりたいことを発信する。

まとめの全体会

登壇したのは各分科会のコーディネーターと深谷信介さん、太田市長鈴木辰吉センター長の6名。センター長は、以下の内容を一日を通してのまとめとしました。「製造業により発展してきたまちでありながら、地域の7割を森林が占め、農村地域も併せ持つ豊田市。それは日本の縮図のようなまち。日本はこの50年間、高度経済成長のなかで飛躍的な繁栄を築きました。それは競いあつて成長する社会。しかし今、日本の人口は減少に転じ、経済も縮小する可能性が出ています。今日一日を通して行った議論では「支え合う」というキーワードがすべてのテーマにおいて共通していました。競い合って成長する社会から「支え合って豊かになる社会」を目指すセンターの方向性に確信を持ち、いなかとまちのミライのあり方を展望することができた一日でした。」

第2回「じねんの学校で学ぶ」



まちなか
MACHINAKA

1月31日（日）、第2回「じねんの学校で学ぶ」講座が高橋コミュニティセンターで開催されました。午前は青森県弘前市でリンゴの無農薬栽培をしている木村秋則さんの講演会。自然栽培や野菜、生き方、使命のことまで、植物や地球への愛を感じるお話でした。午後は、整体師で武道家の河野智聖さんの宇宙と繋がるカラダのワークショップ。木村さん×じねんネット



ワークのトークセッションの後は、グループに別れて共有を行いました。しなやかな心と宇宙につながる体で、じねん（自然）に生きる。このような生き方、つながりについて深く学ぶことができた一日となりました。

ミライの職業訓練校成果報告会



まちなか
MACHINAKA

2月21日（日）、地域スモールビジネス研究会が主催する「ミライの職業訓練校（※3）受講生成果報告会」が、とよた市民活動センターで開催されました。ひとりなら悩みであるはずの「モヤモヤ」を、集まった仲間で分かち合い、新たな飛躍のヒントの資源として取り組んできた成果を発表しました。「モヤモヤ」がスッキリした人、あえてそのままの状態にしている人、「モヤモヤ」を進化させた人…と、面白い



素晴らしい報告を共有しました。「ミライの職業訓練校」は、新☆豊田市誕生10周年プロジェクト「市民発！まちづくりシン展事業」として採択され、27年度は実施されました。もうすでに来年度の受講希望者が現れはじめ、28年度も実施して欲しいという要望が寄せられています。



の3点を意識することが大事だとし、まとめとして、まちづくりは「まちをどのくらい自分ゴト化するか？」が重要との示唆をいただきました。

里c o トーク

『里c o』（※1）トークショーでは、「女性が住みやすいと人は来ないのでは」と考え、女性が集まりやすい昼間に地域スモールビジネス研究会として集まり、「移住へのハードルを下げる情報発信をしよう」という話から本を出版することになったという経緯や出版、販売についてお話しいただきました。プロのライターによる講座を受けた女性市民ライターが取材し、記事にしたこと、生き生きとした生活を伝えるための写真となるよう工夫したことや、費用捻出のための出資者集め、書店にも置いてもらうための手続き、ネットショップの開設、amazon

での販売手続きなど、制作から販売までの全てを、研究会のメンバーが自分たちで行ったことによる苦労などを聞くことができました。また、「里c o」を販売したことで新たなネットワークが広がったり、ガイドブックなどの製作依頼があったりと、小仕事が生まれたそうです。深谷信介さんからは、値段をつけて販売したことで、一口意識が出てがんばれると好評いただき、豊田市長からは、自然体でこれからもやってくださいと激励をいただきました。

くるま座談会

食と農専門部会

コーディネーター澁澤寿一さん（NPO法人「共存の森ネットワーク」理事長）の、マタギ（※2）の写真から始まった食と農専門部会。日本が決定的に変化したのは50年前。便利さを手に入れた代わりに、お金への不安に支配される世の中になりました。その反動として近年、祖先が紡いできた生活の多様性と繋がり豊かさが再評価されています。ゲストの（農）みどりの里の野中慎吾さんからのプレゼンテーションでは、不可能と言われたイチゴの自然栽培を成功させ、米を含め多種類の野菜を流通させたエピソードをご紹介いただきました。山奥と都会



を経験し、産業の大きさも感じたそうです。もう一つの話は「農福連携」。農業者と福祉分野の連携には、たくさんの方の決のヒントがありました。参加者は農に携わる方も多く、それぞれ一言コメントし、野中さんとの貴重なやり取りがありました。「中庸」が大切という野中さん。中庸とは「柔軟」ということ。譲れないことはしっかりと持ちつつ、それ以外のことは柔軟に受け入れることができるようにしておくことが大切ということ。農業に多くの人が関わり、世の中が変化していくのが見えるような、未来の希望にあふれた会になりました。

移住定住専門部会

名古屋大学教授の高野雅夫さんをコーディネーターに4人のゲストスピーカーを迎え「いなかのシェアハウス」に腑に落ちる暮らし方・働き方」をテーマに行われました。千葉県いすみ市のシェアハウス「星空の家」は、地元の人にも肩の力を抜いて気軽に来もらえる「場」として図書館が作られ

ています。豊田市では、「日本再発進！若者よ、田舎をめざそうプロジェクト」の社員宿舎だった「福蔵寺」に自然と人が集いシェアハウスとなり、同時にシェアオフィスの機能も持つようになり、地域の拠り所ともなっています。岡山県美作市の「山村シェアハウス」では、移住支援と人事育成の活動の中で、ひきこもりの人が活躍できるようにになった喜びに着目し「人おこし」（ひきこもり若者支援）シェアハウスを再スタートされます。奈良県東吉野村では、地元の仕事が無いなら仕事のある人に来てもらおうと、クリエーター向けのシェアオフィスをオー



注（※1）地域スモールビジネス研究会が出版した、女性の山里暮らしを紹介したガイドブック （※2）東北地方や北海道で、おもに冬期に山林で狩猟を行う集団のこと （※3）山里で生きるために必要な技を学び、仲間とともに実践し、切磋琢磨しながら山里で生きる『糶』を身につける学びの場として、地域スモールビジネス研究会が開校